

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：24405

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13891

研究課題名(和文)対話主義に基づく臨床教育学の方法開発

研究課題名(英文)Rethinking of Methodology of Clinical Pedagogy Based on Dialogism

研究代表者

池田 華子(Ikeda, Hanako)

大阪公立大学・国際基幹教育機構 准教授

研究者番号：20610174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、モノログからダイアログへ、「手段としての対話」から「目的としての対話」へと臨床教育学の方法を開いていくことにより、新たな視点から教育の日常にアプローチすることを可能にする方法の開発を目指した。主な成果としては、以下の3点が挙げられる。(1)対話主義の観点からの臨床教育学の方法論に関する捉え直し、(2)臨床教育学の実践的展開への寄与、(3)教職課程での教育への還元(教育現場に応用可能な実践的視点の提示)

研究成果の学術的意義や社会的意義

理論面では、国内における臨床教育学研究のうち、解釈学やナラティブ・アプローチに基づくものに改めて焦点を当てることにつながった点が挙げられる。また、ポスト・トゥルースの時代と呼ばれる現代において、国内外を通じて、普遍性や共同性を再創出するという観点から、改めて対話への注目が高まっていることを踏まえるなら、本研究は、ポストモダン以後の構築主義や相対主義の影響や、その負の側面を克服するための方途を探ることにつながるという側面も有していると言える。また、実践面では、従来の教育相談活動や事例検討会等に加えて、「チーム学校」を掲げる教育現場での多職種連携への視点を理論と実践の両面から提供するものでもある。

研究成果の概要(英文)：In this study, I aimed to develop methods that enable approaching educational issues from a new perspective by shifting the methodology of clinical pedagogy from "dialogue as a means" to "dialogue as a purpose," moving from monologue to dialogue. The main outcomes include the following:

(1) Reconceptualization of clinical pedagogy from the perspective of dialogism, (2) Contribution to the practical development of clinical pedagogy, (3) Contribution to education in teacher training programs: presenting practical perspectives applicable to educational settings.

研究分野：臨床教育学、教育哲学

キーワード：臨床教育学 対話主義 多声性(ポリフォニー) オープンダイアログ 教育相談 事例検討

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、対人援助領域での対話をめぐる最新の議論を、臨床教育学の方法開発に適用することで、従来の臨床教育学の理論と実践を批判的に捉え直し、その限界や課題を克服するための方法を探ることを目的として開始されたものである。具体的には、2010年代以降、日本国内でも高い注目を集めているフィンランド発のオープンダイアログ（対話を方法とする精神疾患ケアの方法）や、少年司法の領域から始まり、教育との関連では生徒指導分野への応用も進められている修復的対話（人間関係における葛藤や対立を、対話によって平和的に解決する方法。紛争、地域内のトラブル、教育現場でのいじめ等、対人間のコンフリクトに幅広くアプローチできる）を始めとする、対人援助の領域での対話をめぐる最新の研究成果を、臨床教育学の方法開発に適用することを試みたものである。

以上の構想の背景には、解釈学を方法として採用する臨床教育学が抱える課題についての認識があった。1988年、オランダの教育学者ランゲフェルト（現象学的・人間学的教育学）の影響を大きく受けつつ、国内初の臨床教育学講座が京都大学に設置された。同時期から90年代にかけては、臨床心理学が一世を風靡し、その延長や応用としての研究が、教育学を含む複数の領域において注目を集めていたが、そうした状況下で、臨床教育学は、創設当初から、他の学問の延長や応用にとどまらない、臨床教育学独自の方法を創出する必要性に強く迫られていたと言える。中でも、同講座の草創期を支えた一人である皇紀夫の議論は、そうした志向を明確に打ち出していた。皇は、哲学者リクールの解釈学（レトリック論）を援用しつつ、教育現実をテキストと見立てて多様な読みの可能性を探る、解釈学的アプローチを採用し、教育現場において自明化して見えなくなっている事実や、適切な言葉を与えられずに埋もれている意味にアプローチする方法を探究してきた。その研究成果は、理論面のみにとどまらず、現職教員を対象とする教育相談（教育コンサルテーション）活動や事例研究会等、実践との往還の中で深められてきた。

研究代表者は、皇による上記のアプローチに学びつつ、またそれと並行してナラティブ・アプローチ（当事者の語りやその背後にある物語に注目する、家族療法の技法を源流にもつ）も採用しながら、臨床教育学の方法を探究してきた。その一環として、フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユのテキスト解釈を通じて、その思想に内在する存在しないもの、見えないもの、聴こえない声に対してアプローチする方法としての「注意（attention）」概念を見出した他、東日本大震災を契機として、ヴェイユの思想を人生における様々な厄災（カタストロフィ）危機や葛藤に臨む知として捉え直す機会を得たことから、対人援助領域の研究へも関心を広げてきた。

しかしながら、本研究の開始当初において、すでに臨床教育学における解釈学的アプローチには、各種の限界が認められることが指摘されていた。解釈学的循環という根本的な問題（部分全体から理解されなければならないが、全体は部分から理解されなければならないという問題）は当然のことながら、それに加えて、このアプローチがもたらす現実の変化に関する説明枠組み（例えば 既存の意味 A から新たな意味 B への移行 といった図式的モデル）自体が有する限界についても検討すべきであることが指摘されていた（皇 2018）。また、これと非常によく似た点がナラティブ・アプローチにも認められるということも指摘しているのが野口（2018）である。野口（2018）では、オープンダイアログの観点からナラティブ・アプローチを批判的に再考した論考が収録されており、そこで提示された分析枠組みは、臨床教育学における解釈学的アプローチの限界や課題を考察する上でも、有益な視点を提示するものと考えられた。

以上を踏まえた上で、本研究では、前出の野口（2018）の枠組みを下敷きにしつつ、臨床教育学における解釈学的アプローチとその説明枠組み（図式的モデル）が前提としている、誤った解釈を正しい解釈へと導こうとする病理モデル、解釈を個人の価値や見解の反映と見なす個人主義モデル、解釈がつねにある一つの視点（＝立場）からの解釈になってしまうという、解釈者の視点の単一性、の3点について主に考察することとした。この点に関連して、前出の皇（2018: 455-461）は、イタリアの哲学者アガンベンによる「様態的差異」論を手がかりに、意味 A から意味 B への直線的変化ではなく、多様な意味の「様態」（変調、転調、流れ）を捉える方法を模索している。これにより、上記 についてには克服の可能性があるが、 については十分に扱いきれていないものと考えられた。

この他、臨床教育学の方法開発に関しては、ナラティブ・アプローチとの関連からは田中昌弥によるナラティブ的探究（NI: Narrative Inquiry）の議論が挙げられる。また、解釈学自体の限界克服という点に関しては、ガダマーの対話論から始まり、了解不可能な他者との関係（絶対的他者性、断絶・差異の経験）を主題とする、レヴィナスやデリダに端を発したポストモダン以降の他者論等の蓄積がある。他方、同じくアガンベンへの重要な言及が見られる哲学者・國分功一郎の『中動態の世界』（2017年、医学書院）が、対人援助領域の理論と実践に大きな影響を与えたことも注目に値する。能動でも受動でもない中動態の世界に目を向けることは、ケアをめぐる援助者・被援助者関係の課題（＝援助のモノローグ性）を克服するための重要な手がかりとなる。国内におけるオープンダイアログの普及に尽力する精神科医・斎藤環も國分の議論に注目し、オープンダイアログが重視する対話主義を実現する上で、中動態の視点をもつことの有効性を指摘していた（斎藤 2019）。

以上を踏まえた上で、本研究では「臨床教育学における解釈学的アプローチとその説明枠組みの限界をいかにして克服するか」を問いとして、以下に記す方法によりこの問題に取り組んだ。

#### 【参考文献】

- ・野口裕二『ナラティブと共同性 自助グループ・当事者研究・オープンダイアローグ』青土社、2018年
- ・皇紀夫『臨床教育学三十年 その歩みといま』ミネルヴァ書房、2018年
- ・斎藤環「臨床で使える中動態 オープンダイアローグとの関連性をもとに」『精神看護』22巻1号、21-28頁

## 2. 研究の目的

本研究は、教育現場において自明化して見えなくなっている事実や、適切な言葉を与えられずに埋もれている意味にアプローチするための方法として、主に解釈学の方法を採用してきた臨床教育学について再考を試みるものである。既述の通り、解釈学的方法とそれに基づく説明枠組みには、すでいくつかの課題や限界が指摘されていた。この点について、本研究では、病理モデル、個人主義モデル、解釈者の視点の単一性、の三点から整理し、これらを克服するための手がかりを、近年の対人援助領域における対話(オープンダイアローグや修復的対話)をめぐる議論に求めることとした。これにより、前出の皇の議論では解消されていないと考えられる、問題点をモノローグ(対話の欠如)の弊害として捉え直し、その克服の道を示すこと、また、問題点について、同様の観点から捉え直すことにより、新たな臨床教育学の方法を開発・提示することを目的とした。

また、別の観点から言えば、以上のことは、臨床教育学の方法に対話という視点を導入することが、その理論と実践にどのような変化をもたらすのか、を検証することを含んでいる。改めて言うまでもないことだが、対話は教育の基本要素とも言えるものであり、臨床教育学の実践的展開の場の一つとしての教育相談(教育コンサルテーション)の現場でも、当事者(現職教員やスクールソーシャルワーカー等)と臨床教育学を専門とする者との間には、対話的な関係が成立している側面もある。ただし、それでもなお、一般に教育領域における対話では、結論を下すことや、合意に至ること等を目的とした対話(=手段としての対話)が大半を占め、対話続けることそれ自体に価値を置く対話(=目的としての対話)は退けられる傾向が強いのではないかと考えられる。こうした観点から、本研究では、対人援助領域における最新の議論を参照することにより、「目的としての対話」がもつ「手段としての対話」には無い効果について明らかにすることも目的とすることにした。臨床教育学の方法に「目的としての対話」を導入することで、教育の日常をテキストとして解釈するという従来の方法をベースにしながらも、解釈のモノローグ性を克服し、対話(ダイアローグ)を通じて創出された意味や価値を、今ここで共有するプロセスを重視する、新たな臨床教育学の方法開発につながると考えたためである。

## 3. 研究の方法

本研究の研究方法は、主に以下の2点にまとめられる。

- (1)対人援助領域における対話をめぐる議論を理論と実践の両面で参照する。  
具体的には、対話を主たる方法とする対人援助の方法として、オープンダイアローグ(OD)と修復的対話(RJ)の二つを中心に、文献研究とフィールドワーク(参与観察、及び実践者へのインタビュー調査を含む)の両面で要点を整理した。その上で、それがどのように臨床教育学における解釈学的方法の限界克服に寄与しうるかを検討した。
- (2)(1)に基づき、臨床教育学における解釈学的方法を再考する。  
(1)の研究成果に基づいて、「目的としての対話」を実現するための原則(中核となる要素)を導出し(仮説の構築)、抽出された要素に基づいた対話を実践的に紹介するワークショップ等を開催(仮説の検証)。その上で、結果を分析し、臨床教育学の方法に「目的としての対話」を導入する上での課題を考察した上で、新たな臨床教育学の方法を提示することを試みた。

なお、2019年度末より世界中で流行が拡大した新型コロナウイルス感染症の影響により、研究開始直後の時期から、計画していたフィールドワーク等がすべて実施困難な状況となった。しかし、その後、オンライン会議システムの導入を始め、社会全体でもオンラインでの交流に関する理解と環境面での整備が急速に進んだことにより、研究期間全体を通じてみると、少なくとも国内で予定していた必要な調査については実施することができた。

## 4. 研究成果

以上を通じて、本研究では、モノローグからダイアローグへ、「手段としての対話」から「目的としての対話」へと臨床教育学の方法を開いていくことにより、新たな視点から教育の日常にアプローチすることを可能にする方法の開発を目指した。本研究の主な成果としては、以下の3点が挙げられる。

### (1)対話主義の観点からの臨床教育学の捉え直し

主にオープンダイアローグの思想・実践の基盤をなす「対話主義 Dialogism」を中心に、対人援助領域における対話の理論・実践について臨床教育学と接続しながら考察することで、臨床教育学における解釈学的アプローチの限界や課題が、そのモノローグ性にあることがより明確になった。合意形成や調和(ハーモニ)を目指す対話ではなく、多声的(ポリフォニック)な対話、そして、対話に参加する人同士のポリフォニックな関係性の構築を実現するためには、従来の解釈学的対話において考えられてきたこととは別様の見方が必要であること、とりわけ解釈という営みを構成する解釈者と解釈対象との関係性や、解釈の複数性や多義性といった鍵概念の根本的な捉え直しが求められることが明らかにされたと言える。特にオープンダイアローグに基づいて抽出されたポリフォニーの原則は、解釈の一義性を多義性へと開くことに止まらず、解釈の営みを複数の解釈者へと開いていくことの本来的な意義について、新たな視点から捉え直すことを可能にするものだとと言える。

### (2)臨床教育学の実践的展開への寄与

以上のことは、教員や保護者を対象とする教育相談(コンサルテーション)や事例検討会等の、臨床教育学の実践の場の更新・改善に向けた視点の提示等にもつながるものである。例えば、事例検討会で目指されがちな、検討前と検討後の参加者のものの見方・考え方における変化の達成に対して、「目的としての対話」の視点を導入することで、あえてその(暗黙の)「目的」自体にずれを生み出すことが可能になる。また、そもそも一つの正しい解釈を求めて意見交換をするのではなく、参加者一人ひとりの多様な声が、どれ一つとして無視されることなく受け止められるような、安心・安全な対話の場を創出するためには、発言に先立つルールの提示(修復的対話における四つのルール等)や、そのルールに効力を持たせるための雰囲気醸成を含めた、丁寧な場づくりが欠かせない。このことは本研究にご協力いただいた実践者との交流の中で実証的に確かめられた知見でもある。

### (3)教職課程での教育への還元：教育現場に応用可能な実践的視点の提示

研究代表者が本務校で主に担当している教職課程の科目と関連して、対話型の道徳教育の実践、また、その観点からの「考え、議論する道徳」の捉え直し、あるいは、「目的としての対話」に基づく教育相談や生徒指導、対話を土台にした学級経営(心理的安全性、子どもアドボカシー等との関連を含む)の考え方の紹介といった、教育現場に応用可能な実践的視点を受講生らに提示することにつながることができた。

＊

上記の成果に関する国内外における位置づけとインパクトを整理すると以下ようになる。まず理論面では、国内における臨床教育学研究のうち、解釈学やナラティブ・アプローチに基づくものに改めて焦点を当てることにつながった点が挙げられる。国内では、解釈学的アプローチを採る臨床教育学研究の他に、現象学に基づく臨床教育学研究も盛んである(遠藤・大塚 2014他)。ただし、新田(2006)でも示されている通り、解釈学と現象学とは、人間の経験に対する視点の取り方が大きく異なる。現象学における現象学的還元、すなわち、個別の経験・事象の内側から、それを相対化することなしに、その普遍的様相を捉えようとする方法に対して、解釈学では個別具体的な事象に注目しつつも、その特殊性、文脈依存性を超えた普遍性へと至るために、解釈という方法を生み出してきたという背景がある。いずれも近代の自然科学的な知の枠組み、また、そこに内在するパースペクティブ性(モノローグ性)の克服を求めるという点においては共通するものの、上記の点は重要な相違点である。臨床教育学研究における解釈学と現象学との関係をどのように捉えるかという論点は、本研究で直接扱うことのできた範囲を超えるが、本研究成果を踏まえた上で、引き続き、今後の研究課題としたい。

また、現代思想の文脈では、前述のポリフォニックな対話の場(その場に創出される人々のポリフォニックな関係性)への注目は、ポストモダン以後の、相対主義のまん延と社会の分断という問題に回答する側面も含んでいる。その負の側面が認識される中で、国内外を通じて、普遍性や共同性を再創出するという観点から、改めて対話への注目が高まっていることを踏まえるなら、本研究の成果は、ポストモダン以後の構築主義の影響や、その負の側面を克服するための方途を探ることにつながるという面を有していると言える。今日、相対主義の克服という文脈で、例えば、マルクス・ガブリエルの新実在論、あるいは上述の現象学における「間主観性」概念への再注目といったことが挙げられるが、本研究はこうした2010年代以降の「真理」や「共同性」をめぐる議論とも接続可能な論点を有しているということである。この点に関しては、本研究成果を基盤として、引き続き JSPS 科研費「対話主義が開く関係性に関する臨床教育学的研究：構築主義再考の視点から」(24K05719)において、今度は相対主義、構築主義との関連を踏まえながら、臨床教育学の立場から、普遍性や共同性についてどのような知見を導出することができるのか、その現代的意義も含めて、研究を継続する予定である。

また、実践面では、本研究は対人研究領域における対話実践を参照することで、臨床教育学の実践の再考に取り組んだものである。国内では、「チーム学校」といった言葉に象徴されるように、これまで以上に多職種連携が求められる状況にある。教員は従来の教育学に基づく知見に依拠するだけでは、解決困難な事象と直面する機会がますます増えており、教育以外の専門性を有した、多様な職種・立場の人々と連携していくための対話力が求められている。こうした状況下

で、本研究の試みは、教育と社会福祉や医療・看護、あるいは教育の営みとケアの営みとを架橋し、そのポリフォニックな協働の形を探っていくことにつながる視点を提供しうるものとしても位置づけられる。加えて言うならば、このような連携は、現場の実践者に対してだけ求められるべきものではなく、研究者にも同様に求められるべきだろう。複雑さを増す教育の諸問題を的確に捉えるためには、教育学を領域横断的な研究へと開き続けることがこれまで以上に必要だと言える。また、その際、教育学に軸足を置いたまま他の領域に有用な知見を求めるだけではなく、他領域との交流を通じて、社会福祉や医療・看護など、別の専門家・専門職からのリフレクションに耳を傾け応答することが求められるだろう。本研究にご協力いただいた対話実践の実践者（現職教員、スクールソーシャルワーカーを含む）とのつながりは、こうした意味においても重要なものであったと考えている。

#### 【参考文献】

- ・遠藤野ゆり・大塚類『あたりまえを疑え！ 臨床教育学入門』新曜社、2014年
- ・岩内章太郎『普遍性をつくる哲学 「幸福」と「自由」をいかに守るか』NHK出版、2021年
- ・新田義弘『現象学と解釈学』筑摩書房、2006年

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池田華子	4. 巻 126
2. 論文標題 図書紹介 吉田敦彦著『教育のオルタナティブ： ホリスティック教育/ケア 研究のために』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 102-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田華子	4. 巻 2904
2. 論文標題 「わかりにくさ」の引き受け方「学術をわかりやすく伝えること 教育哲学の場合」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学术新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田華子	4. 巻 124
2. 論文標題 距離と接触 「注意」概念による「ケアの倫理」の再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田華子	4. 巻 24
2. 論文標題 臨床教育学における対話主義の可能性と課題 複数の 視点 か複数の 声 か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ホリスティック教育/ケア研究	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田華子	4. 巻 20
2. 論文標題 価値に根ざした対話実践の探究：オープンダイアログと修復的対話を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合教育研究センター紀要（天理大学総合教育研究センター）	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田華子	4. 巻 32
2. 論文標題 書評 岡本哲雄『フランクルの臨床哲学：ホモパティエンスの人間形成論』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 150153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 青木芳恵・池田華子
2. 発表標題 対話におけるプレゼンス 身体性に着目して
3. 学会等名 日本ホリスティック教育/ケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田華子
2. 発表標題 対話主義は何を恢復するか 垂直方向のポリフォニーと水平方向のポリフォニーの観点から
3. 学会等名 日本ホリスティック教育/ケア学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 池田華子
2. 発表標題 臨床教育学における解釈学的アプローチの新展開 対話主義とリフレクティング
3. 学会等名 関西教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 矢野智司・井谷信彦 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 世織書房	5. 総ページ数 456
3. 書名 教育の世界が開かれるとき：何が教育学的思考を発動させるのか（分担執筆：第1章「弱さ」に応答する臨床知の形成：対話主義の実現に向けて）	

1. 著者名 吉田敦彦・河野桃子・孫美幸 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 267
3. 書名 教育とケアへのホリスティック・アプローチ（分担執筆：第5章 対話主義は何を恢復するか 水平方向および垂直方向のポリフォニーの観点から）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------